

## 一、三つの夢

晩秋のある日、男は夢を見た。ケーブルカーの山頂駅で、なぜかホームの両側に、麓へ下る乗り物がある。男は麓に向かって左側の、木で作られた粗末な車に横たわっている。

右側の車は、漆黒の車体に金色の飾りが付いていて、いかにも立派であった。

「あっちに乗りたいな」

子どものように駄々をこねる男を、三十代らしき夫婦が見下ろしている。女性のほうが、悲しげにつぶやいた。

「あれにはもう、乗る人が決まっているの」

二人は父方の祖父母だ、と男は感じた。写真でしか見たことがない。男の父は、小学生のころに両親を亡くしていた。

「ふうん」

納得のいかない様子の男をよそに、車は動き始めた。やがて速度が上がり、男は必死にしがみつく。レールを下っていく間に、車はどんどん壊れ、ついには戸板に車輪が付いているだけの状態となった。

もうこれ以上は無理、と思ったとき、車は止まった。いつの間にかレールが尽きていて、辺りは短い草が一面に茂っている。ふと、拍手の音が聞こえてきた。

知人も、見知らぬ人もいた。みんな、戸板に横たわる男に拍手を送っている。そんな賞賛に値するようなことを、自分はやってきただろうか、と男はいぶかしく思った。

あの、美しい車はどこへ向かったのか、男は知りたかった。ミカゲ、という言葉が頭に浮かんできたが、意味はよく分からない。

あっちに乗らなくて良かった、となぜか男はそう思った。

年の瀬を迎えたある日、男はまた夢を見た。道路から少し階段を下った小さな書店に、男はいる。老夫婦が、いかにも辛そうに椅子に腰掛けていた。客なのか、店主なのか分からない。やがて、一台の小型のバスが着いた。

老夫婦はどこにそんな元気があったのか、勢いよく立ち上がり、一目散にバスに向かっていく。男はあとを追ったが、なかなか追いつけない。

老夫婦はまるでバスに吸い込まれるように、乗り込んでいった。なぜか、表情は明るかった。さきほどまでの辛そうな様子ではなかった。

男はバスに興味を持った。近寄ってのぞいてみると、三つの椅子が三列並んでいる。老夫婦もそのどこかに座っているはずなのだが、乗客の顔は誰が誰なのか、もう判別できなかった。みんな同じような顔つきである。

八つの座席は埋まっていたが、中央の一つだけ、ぽつんと空いている。男の席ではないようだ。だが、どうやら男に近い人物が座る場所、と感じられた。

中央の座席を空けたまま、バスは発車した。フロントガラスに行き先が、ひらがなで、二行に分けて書いてあった。

しじょう

ぼうじょう行き

それを見て、男は背筋が寒くなった。ここは京都だったのか、と冷静に分析する一方で、ああ乗らなくて良かった、という思いが沸々とわいてきた。

バスの行き先は、男に「死」を連想させたのだった。

新年を迎え、以上の二つの夢について、男はしばしば考えるようになった。どうも、近しい肉親の死、そしてそれはおそらく、男の父の死を、暗示しているような気がしてならない。男はすでに、母を亡くしていた。

それに、と男は正月の飾り付けをしていた父の、例年になく荘重な物腰を思い起こした。元来、几帳面な父だが、あの時の様子は男が口を挟めないほど、別の次元にいる存在と対話しているようであった。

「代わろうか」

脚立に乗って玄関の飾りをする父に、声をかけようとした。肺が悪く、あまり無理はさせられない。だが、声をかけることで、父にとって大切な儀式を、妨げてしまうような気がしたのである。これが最期になるかもしれない、という父の切実な思いが、男にも伝わってきたのだろうか。

だが、いくら予兆が重なったところで、それらは男の主観に過ぎず、正しいとは限らない。まあ、まだまだ大丈夫だ。そんなふうに考えていた男にとどめを刺したのは、正月が済んだばかりのある日、父が見た夢だった。

「俺ももう、長くはないぞ」

その言葉を添えて父が語ったのは、およそ次のような夢である。

街を歩いていると、いきなり肩をたたかれた。振り向くと、Y君の笑顔があった。彼は、会社に勤めていた頃の部下で、営業にはあまり向いていなかった。たしか五年ほどで辞めていったはずだ。その後、新しく就いた仕事がうまくいかず、酒浸りになり肝臓をやられ、若くして亡くなった、と聞いている。

そのY君が、肩をたたいて親しげにほほえんでいる。思わず、俺はつぶやいていた。

「ああ、迎えに来てくれたのか、Y君」

それだけの夢だったが、男に与えた衝撃は大きかった。父もまた、死が訪れる夢を見ていた。男が見た二つの夢について、伝えようかとも思ったが、父に余計な不安を抱かせても仕方がないので、やめた。話さない方がいい、と思った。

父子で「死」を暗示する夢を見た、という事実は、もはや覆せない。たしかに、父は年々、弱ってきていた。肺を五、六回手術しているので、近ごろではゆっくりと歩いて喫茶店に行くのがやっと、という状態だった。

年末から少し、食欲が落ちていた。だが、そんな中で正月の準備をやったのけたのだから、不思議である。

とはいえ、今年はまだ始まったばかり。父子で見た夢が現実になるとしても、まだ時間は残されているはずだ、男はそう高をくくっていた。

## 二、縁日にて

昼下がり、男は境内を歩いていた。せっかくの友人との食事も話が弾まず、早々に解散して、中途半端な午後の空白だった。

父の死は、もはや避けられないところまで来ている。長い年月をかけて弱ってきた肺が、もう限界だというのだ。

「俺ももう、長くはないぞ」

そう告げた日からわずか五日後、父は救急車で運ばれた。四十度近い熱で、起き上がることが出来なかったのも、ただ一人の同居人である男が、あわてて救急車を呼んだのである。インフルエンザ、ということだった。点滴を打ちに通っていた病院で、感染してしまったらしい。

「肺がかなり厳しい状況です」

「インフルエンザの肺炎が良くなっても、肺の機能自体が衰えているので、近々、自力での呼吸が難しくなるかもしれません」

「そうなった場合、どこまで治療するか、相談して決めて下さい」

医師の宣告は、突然だった。まさかそこまで事態が切迫しているとは、男は思っていなかった。良くなって退院して、酸素吸入が時々必要になる、その程度にしか思っていなかった。

「お父さん、ボンベ引きながら、ゆっくり喫茶店に行くかも」

すでに二人の子どもがいる妹は、そんな冗談まで口にした。これまでと同様に、また戻ってくることを、私も妹も疑ってはいなかった。

「妹さんと相談されますか」

医師は、すぐにでも答えがほしい様子である。それほどまでに、予断を許さない状況なのだろう。黙っている私に、医師は追い打ちをかけてくる。

「気管挿管、心臓マッサージも出来ますが、挿管すると、病院での生活になります。心臓マッサージは体への侵襲が著しく、もう今の段階では、あまりおすすめできません。肺移植しかない状況ですが、高齢で弱っているので、難しいですね」

医師の話しぶりからすると、出来そうな治療はいずれにせよ一時的な延命措置に過ぎず、本人の苦痛を増すだけではないか。男はそう理解した。挿管も、マッサージもせず、なるべく自然な状態で最期を迎えてほしい、と男は願った。

「相談しますが、妹も、そう言うと思います」

「お役に立てず、申し訳ありません」

医師は辛そうに頭を下げた。父はもう、家には帰れない。それどころか、病室のベッドの足下に置いてある新しいスリッパすら、履く機会があるかどうか、分からないのだ。青黒い光沢が、死の淵を連想させた。せめてもう少し明るい色にすれば良かった、と男は悔やんだ。

先日の医師の宣告を思い浮かべながら、男は縁日の開かれている境内を歩いた。父はもはや、酸素マスクを外せない。外すと、そのまま死に至ることになるらしい。

男は、休日の午後を待たまわしていた。父はベッドから身動きできないが、たちまち危険な状態に陥ることはなさそうだった。

そこで、約束していた友人と食事を共にしたのだが、何やらすべてが虚しく、全く楽しめなかった。早々に別れて、街を歩いているうちに、寺院の境内にたどり着いたのだ。

金がないと困るが、あってもどうしようもない事態に直面して、男は父の人生、そして男自身の人生を振り返っていた。

縁日もまた、思い出にあふれていた。商品として成立しているのかどうか、あやしい品々が無造作に置かれている。いつ、どこで手に入れたのか分からないキーホルダー、糸のほつれた財布、色のはげた木彫り人形、正月の干支の置物、それらはコンビニの管理された清潔感、窮屈な秩序から離れて、超然と並べられている。境内という空間には、別の時間が流れている。それが男には痛快だった。

売り手は、一つの品が売れるたび、傷つき、悲しみ、そしてその品にこもる思い出の分だけ身軽になる。自由になる。過去からの自由を求めて、売り手は月に一度、縁日に集う。ただ商品売るためだけの新出の店は、そこでは浮き上がって見える。一つ一つの商品に宿る思いが、軽すぎるのだ。

己の内にも、そして外側にも濃密な思い出の渦巻く中を、男は押し流されていく。今の男には、居心地のよい空間だった。

だが、ずっとここにはいられない。この空間が、何らかの真実を物語っているとしても、男の居場所は、コンビニがあくなき商品の生産と消費、廃棄を繰り返す「現代」なのだ。そして、そこでは今まさに、男の父が死んでいこうとしている。

門が迫っていた。これをくぐり抜けると、何の疑問も抱かずに男は一人の「客」になる。人生の満足度を客としての満足度に置き換えて暮らす日々。小さな欲望を、大事そうに抱えて生きる。境内で出会った濃密で連続的な思い出など、置き去りにして進んでいく。過去はどこまでも煩わしく、蓄積は重荷に過ぎない。それが、都市に生きる現代人に課せられた掟なのだろうか。スケールの小さな、脆弱な「コンビニ人生」である。そして、男はそれすら満足に生きることができないのだ。

縁日で何も買えないくせに、コンビニで何の恥じらいもなく新商品を買う自分自身が、男は悲しかった。戻ろうか、と思ったが、もう門にさしかかかっていて、振り向くのがやっとなかった。

だが、悲しみの中で最後に見た光景を、男は忘れることが出来ないだろう。

無縁仏となった墓のあたりから、光の波動が出ていて、それが縁日で行き交う人々の体をすり抜け、道の反対側にある金色の輪を回している、そんな不思議な光景だった。

瞬時に男の脳裏に刻まれた一枚の絵には、過去、現在、そして未来が描かれていた。それらは互いに融け合い、調和されていく。金色の輪は、実際には誰が回したのか分からない。そこには誰もいなかったが、ただゆるやかに回っている。

未来へのひたむきな営みであった。「人生の輪」と男は名付けた。それは、容易には見ることの出来ない、しかし、ごく身近にある輪のように、男には思えるのだった。

父が亡くなって初めて、父の回してきた輪の偉大さが分かるのかもしれない。男はもはや振り向くことなく、境内を後にした。そして、自分の回すべき輪をひたむきに回し続けたい、と願った。

### 三、三世の夜

「すぐ来て下さい」

病院から電話があったのは、出勤の途中だった。男が担当する授業まで、まだかなりの時間があった。学習塾の非常勤講師という不安定な立場で、男はもう、二十年近く生計を立てている。

塾の本部に電話をして、事情を告げると代わりの講師を派遣してくれることになった。授業の直前でなくてよかった、と男はため息をつき、病院へ急いだ。

「明日の朝まではもたないでしょう」

当直の若い医師は言った。電話をくれた時、血圧が急に低下して、危ない状況だったらしい。

「息子さんが来るので、がんばって」

看護師がそう言うと、何とか持ち直した、ということだった。

男は長い一夜を、病室で過ごすことになった。いつ、どうなるか分からない状況で生命の最期の時を見守る難しさを、男は初めて知った。だが、無知なのは男だけで、当直医や看護師には、およその時間帯は分かっていたのだろう。

神経を張り詰めすぎて、夜中の二時頃になると、男はもうへとへとだった。少しでも長く生きてほしい、と思う一方で、早くけりがつかないか、などと考えてしまう。父の意識はもはやない、ということだったが、耳は聞こえているので励ましてあげて下さい、と看護師から言われていた。

しかし、もう限界でソファーに横になろうとしたとき、当直医と看護師が入ってきた。二人は容体をみて、静かに告げた。

「手を握って、呼びかけてあげてください」

ああ、いよいよ父は旅立つのだ、と男は思った。ちょうど冬の新しい夜明けとともに。未練がましいことは言うまい、と男は決めた。そこで、父が心置きなく旅立てるように、感謝の言葉を連ねたのだが、そのまま三十分が過ぎ、一時間が過ぎていく。さすがに男のかける言葉も、精神力もなくなり、やがて二時間になると指がつってきた。

結局、朝を迎えた。八時になっても九時になっても、父の容体は変わらないようだった。男に「朝までもたない」と告げた当直医が、病室に入ってきた。男は少し、苛立っていた。「朝までもちましたね」と言ってやろうか、と思った。

看護師が、何やら男に話しかけている。電気ひげそりと、スポンジブラシを売店で買ってきてほしい、というのだ。本当なら、入院したときにそろえておく物だ、と看護師が高飛車に言うので、男は頭にきた。

「今、この状態でそんな物が必要なんですか」

「少しでもきれいにして、送っ……おいてあげたいんです」

看護師は少しひるんだものの、きっぱりと言った。「送ってあげたい」と言いかけて言葉を選んだのは、さすがだ、と男は感心したが、病床を離れることには抵抗があった。

「お願いします」

重ねて請われ、仕方なく男は売店へ向かった。早く五分くらいか、と計算しながら急

いだ。念のために、携帯電話をポケットに入れた。

売店では気持ちがあせっているせいか、商品が見つからない。電気ひげそりは見つかったが、スポンジブラシがよく分からない。レジが混んでいて、男はさらにあせった。

マナーモードにしておいた携帯電話が震えた。

「今、どこですか」

男に買い物を要請した看護師だ。売店でスポンジブラシを探している、と伝えた。

「すぐに戻ってきてください」

「買い物はどうしますか」

男は意地悪な気持ちだった。あの状況で、病床を離れさせるのが、そもそも間違っている、と腹が立っていた。

「もういいですから、そのまますぐに」

看護師はあわてている。もし間に合わなければ、どう責任を取るのだろう。男は何のために一晩、病室で過ごしたのか分からなくなる。そして、その失策は、二度と取り返しがつかないのだ。

看護師への不信感を募らせながら、男は病室へ急いだ。すでに主治医が来ていて、男を枕元に招いた。

「もう、酸素が脳に行ってません」

「心臓がまだ、動いています」

医師の冷静さに励まされ、男も父の最期を観察した。

「さっきまでとは、色が違いますね」

額には、もはや赤みはなかった。ふと、看護師と目が合った。

「すみませんでした」

男は何も言わなかった。看護師は、医師から叱られたのかもしれない、と思った。

「酸素を外して」

看護師はてきぱきと、吸入用の装置を片付け始めた。いよいよ、長い一夜が終わるのだ。男の脳裏には、金色の輪が浮かんでいた。父の回していた輪が、今、止まる。いや、しばらくはカラカラと回り、やがて人知れず止まるのかもしれない。

婿養子の父は、祖父から受け継いだ我が家の歴史を一步、未来へと進めたのだ。祖父は一月二十六日に死に、父は今、一月二十七日に死んでいく。

その一日は、まさに命がけの一步なのだ。男は悲しみがこみ上げる中、見送ることが出来る喜びを感じていた。母親の臨終には立ち会えなかったが、今回は大切な役割を果たせたようで、ほっとした。

傍らで、医師が検死を進めている。

「九時二十二分です」

そう告げて、看護師とともに深々と頭を下げた。

妹がやって来たのは、その直後だった。

「間に合わなかった」

妹はそう叫んで、涙を流した。

「五分ほど前だった」

男は小さなウソをついた。医師がピクリと肩で反応したが、何も言わない。入院から二

週間足らずの短い期間だったが、この主治医で良かったと男は改めて思った。

さまざまな手続きが押し寄せてくる。それに追われながら、男はぼんやりと考えていた。

もし、自分が一月二十八日に死んだならば、家の歴史をまた一步、進めることになるのかもしれない。だが、好き勝手に生きてきた自分は、そうならないだろう。全く関係のない真夏に死んで、ドライアイスの費用が高く付き、妹に文句を言われてしまうかもしれない。

それもまた人生には違いない。だが、せめて与えられた輪を、ひたむきに回し続けていきたい。平べったいキャンピングカーを思わせる、白い車に乗りながら、男は切に願っていた。その車を、主治医と看護師が丁重に見送っている。

生きている限り、人には回すべき輪が、与えられているのだ。たとえ、それが見えなくても。

過去、現在そして未来へと受け継がれていく三世の輪に、男はかすかに触れたような気がした。そして、その輪をひたむきに回したいと願った。

